

將軍

芥川龍之介

一 白襷隊

明治三十七年十一月二十六日の

未明だった。第×師団第×聯隊の

白襷隊は、しろだすきたい松樹山しょうじゅざんの補備砲台ほびほうだいを奪

取するため、くじゅつさんこうち九十三高地ほくろくの北麓

を出発した。

路は山陰みちやまかげに沿うていたから、隊

形も今日は特別に、四列側面の行

進だった。その草もない薄闇うすやみの路

に、銃身を並べた一隊の兵が、白しろだ

襷すきばかり仄ほのめかせながら、静かに靴くつ

を鳴らして行くのは、悲壮な光景

に違いなかった。現に指揮官のM

大尉なぞは、この隊の先頭に立つ

た時から、別人のように口数くちかずの少

い、沈んだ顔かおいろ色をしているのだつた。が、兵は皆思いのほか、平生の元気を失わなかった。それは一つには日本魂やまとだましいの力、二つには酒の力だった。

しばらく行進を続けた後のち、隊は石の多い山陰やまかげから、風当りの強い河原かわらへ出た。

「おい、後うしろを見る。」

紙屋だったと云う田口たぐちいっとうそつ一等卒は、

同じ中隊から選抜された、これは  
大工だいくだったと云う、堀尾ほりお一等卒に  
話しかけた。

「みんなこっちへ敬礼している  
ぜ。」

堀尾一等卒は振り返った。なる  
ほどそう云われて見ると、黒々くろくろと  
盛りも上った高地の上には、聯隊長  
始め何人かの将校たちが、やや赤  
らんだ空を後うしろに、この死地に向う

一隊の士卒へ、最後の敬礼を送っていた。

「どうだい？ 大したものじゃないか？  
白襷隊しろだすきたいになるのも名誉だな。」

「何が名誉だ？」

堀尾一等卒は苦々にがにがしそうに、肩の上の銃を揺ゆり上げた。

「こちとらはみんな死しに行くのだぜ。して見ればあれは×××××

××××××××××そうって云う  
のだ。こんな安上りやすあがな事はなかる  
うじゃねえか？」

「それはいけない。そんな事を云っ  
ては×××すまない。」

「べらぼうめ！ すむもすまねえ  
もあるものか！ 酒保しゅほの酒を一合  
買うのでも、敬礼だけでは売りは  
しめえ。」

田口一等卒は口を噤つぶんだ。それ

は酒気さえ帯びていれば、皮肉な  
事ばかり並べたがる、相手の癖に  
慣なれているからだっただ。しかし堀  
尾一等卒は、執拗しつようにまだ話し続け  
た。

「それは敬礼で買うとは云わねえ。  
やれ×××××とか、やれ×××  
××だとか、いろんな勿体もったいをつけ  
やがるだろう。だがそんな事は嘘うそっ  
八はちだ。なあ、兄弟。そうじゃねえ

か？」

堀尾一等卒にこう云われたのは、  
これも同じ中隊にいた、小学校の  
教師きょうしだったと云う、おとなしい江  
木上等兵ぎじょうとせいだった。が、そのおとな  
しい上等兵が、この時だけはどう  
云う訣わけか、急に噛かみつきそうな権けん  
幕まくを見せた。そうして酒臭い相手  
の顔へ、悪辣あくらつな返答を抛ほうりつけた。  
「莫迦野郎ばかやろう！ おれたちは死ぬの

が役目じゃないか？」

その時もう白襦隊は、河原の向うへ上っていた。そこには泥を塗<sup>ぬ</sup>り固めた、支那人の民家が七八軒、ひっそりと暁<sup>あかつき</sup>を迎えている、

その家々の屋根の上には、石油色に襞<sup>ひだ</sup>をなぞった、寒い茶褐色<sup>しょうじゅう</sup>の松樹<sup>しょうじゅ</sup>山<sup>ざん</sup>が、目の前に迫って見えるのだった。隊はこの村を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみな

らずいずれも武装したまま、幾条かの交通路に腹這いながら、じりじり敵前へ向う事になった。

勿論江木上等兵も、その中に四

つ這いを続けて行った。「酒保の酒を一合買うのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」そう云う

堀尾一等卒の言葉は、同時にまた彼の腹の底だった。しかし口数の少い彼は、じつとその考えを持ち

こたえていた。それだけに、一層  
戦友の言葉は、ちようど傷痕きずあとにで  
も触ふれられたような、腹立たしい  
悲しみを与えたのだった。彼は凍こご  
えついた交通路を、獣けもののように這  
い続けながら、戦争と云う事を考  
えたり、死と云う事を考えたりし  
た。が、そう云う考えからは、寸すん  
毫ごうの光明も得られなかった。死は  
×××××にしても、所詮しょせんは呪のろう

べき怪物だった。戦争は、彼  
はほとんど戦争は、罪悪と云う気  
さえしなかった。罪悪は戦争に比  
べると、個人の情熱に根ざしてい  
るだけ、××××××××出来る点  
があつた。しかし××××××××  
××××××××ほかならなかつた。  
しかも彼は、いや、彼ばかり  
でもない。各師団から選抜された、  
二千余人余りの白襷隊は、しろだすきたいその大な

る×××にも、厭いやでも死ななければならぬのだった。……

「来た。来た。お前はどこの聯隊れんたいだ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊  
はいつか松樹山の麓ふもとの、集合地へ  
着いているのだった。そこにはも  
うカアキイ服に、古めかしい襷たすきを  
あやどった、各師団の兵が集まっ  
ている、 彼に声をかけたのも、

そう云う連中の一人だった。その兵は石に腰をかけながら、うつすり流れ出した朝日の光に、片頬の面砲にきびをつぶしていた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顔をしたまま、何ともその冗談じょうたんに答えなかった。

何時間かの後のち、この歩兵陣地の上には、もう彼我ひがの砲弾が、凄ますさ

じい唸<sup>うな</sup>りを飛ばせていた。目の前  
に聳えた松樹山の山腹にも、李家<sup>りかと</sup>  
屯<sup>ん</sup>の我海軍砲は、幾たびか黄色い  
土煙<sup>つちけむり</sup>を揚げた。その土煙の舞い上<sup>あが</sup>  
る合間<sup>あいま</sup>に、薄紫の光が迸<sup>ほとばし</sup>るのも、  
昼だけに、一層悲壮だった。しか  
し二千人の白襪隊<sup>しろだすきたい</sup>は、こつ云う砲  
撃の中に機<sup>き</sup>を待ちながら、やはり  
平生の元気を失わなかった。また  
恐怖に挫<sup>ひし</sup>がれないためには、出来

るだけ陽気に振舞うほか、仕様の  
ない事も事実だった。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。そ  
の拍子ひょうしに長い叫び声こゑが、もう一度  
頭上の空気を裂いた。彼は思わず  
首を縮めながら、砂埃すなほこりの立つのを  
避けるためか、手巾ハンカチに鼻を掩おおつて  
いた、田口たぐち一等卒に声をかけた。

「今のは二十八珊にじゅうはっサンチだぜ。」

田口一等卒は笑って見せた。そうして相手が気のつかないように、そつとポケットへ手巾ハンカチをおさめた。それは彼が出征する時、馴染なじみの芸者に貰って来た、縁ふちに繡ぬいのある手巾ハンカチだった。

「音が違うな、二十八珊サンチは。」  
田口一等卒はこう云うと、狼狽ろつぱい

したように姿勢を正した。同時に大勢おおぜいの兵たちも、声のない号令ごうれいで

もかかったように、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕僚ぼくりょうを従えながら、厳然と歩いて来たからだった。

「こら、騒いではいかん。騒ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、や靖さびのある声を伝えた。

「こつ云きりう狭隘あゐな所だから、敬礼

も何もせなくとも好い<sup>よ</sup>。お前達は  
何聯隊の白襷隊<sup>しろだすきたい</sup>じゃ？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の  
顔へじつと注がれるのを感じた。

その眼はほとんど処女のように、  
彼をはにかませるのに足るものだっ  
た。

「はい。歩兵第×聯隊でありま  
す。」

「そうか。大元氣<sup>おおげんき</sup>にやってくれ。」

將軍は彼の手を握った。それから堀尾ほりお一等卒へ、じろりとその眼を転ずると、やはり右手をさし伸のべながら、もう一度同じ事を繰返くりかえした。

「お前も大元気にやってくれ。」

こう云われた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化こうかしたように、直立不動の姿勢になった。幅の広い肩、大きな手、頬骨ほおぼねの高い赭あから顔。

そう云う彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝国軍人の模範もはんらしい、好印象を与えた容子ようすだつた。將軍はそこに立ち止まったまゝ、熱心になお話し続けた。

「今打っている砲台があるな。今夜お前たちはあの砲台を、こつちの物にしてしまふのじゃ。そうすると予備隊は、お前たちの行った跡あとから、あの界隈かいわいの砲台をみんな

手に入れてしまおうのじゃ。何でも  
一遍いっぺんにあの砲台へ、飛びつく心に  
ならなければいかん。」

そう云う内に將軍の声には、い  
つか多少戯曲的な、感激の調子が  
はいつて来た。

「好よいか？ 決して途中に立ち止  
まって、射撃なぞをするじゃない  
ぞ。五尺の体を砲弾だと思つて、  
いきなりあれへ飛びこむのじゃ、

頼んだぞ。どづか、しっかりやつてくれ。」

將軍は「しっかり」の意味を伝えるように、堀尾一等卒の手を握った。そうしてそこを通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。」

堀尾一等卒は狡猾こうかつそうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せめくばをした。

「え、おい。あんな爺じいさんに手を

握られたのじゃ。」

田口一等卒は苦笑した。それを  
見るとどう云う訣か、堀尾一等卒  
の心の中には、何かに済まない気  
が起つた。と同時に相手の苦笑が、  
面憎いような心もちにもなつた。

そこへ江木上等兵が、突然横合  
から声をかけた。

「どうだい、握手で××××の  
は？」

「いけねえ。いけねえ。人真似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはいられなかった。

「××れると思うから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思っている。」

江木上等兵がこう云うと、田口一等卒も口を出した。

「そつだ。みんな御国おくにのために捨

てる命だ。」

「おれは何のためだか知らないが、  
ただ捨ててやるつもりなのだ。×

××××××××でも向けられて見る。

何でも持って行けと云う気になる  
だろう。」

江木上等兵の眉まゆの間あいだには、薄暗

い興奮が動いていた。

「ちようどあんな心もちだ。強盗

は金さえ巻き上げれば、  
×××××

×××云いはしまい。が、おれた

ちはどっち道<sup>みち</sup>死ぬのだ。 ××××

××××××××××××××××

××たのだ。 どうせ死なずにすま

ないのなら、綺麗<sup>きれい</sup>に×××やつた

方が好いじゃないか？」

こう云う言葉を聞いている内に、

まだ酒気が消えていない、堀尾一

等卒の眼の中には、この温厚<sup>おんこう</sup>な戦

友に対する、侮蔑<sup>ぶべつ</sup>の光が加わって

来た。「何だ、命を捨てるくらい？」  
彼は内心そう思いながら、うつとり空へ眼をあげた。そうして今夜は人後に落ちず、將軍の握手に報いるため、肉弾になるうと決心した。……

その夜の八時何分か過ぎ、手擲しゅてき弾だんに中あたつた江木上等兵は、全身黒くろ焦こげになったまま、松樹山しょうじゆざんの山腹に倒れていた。そこへ白襪しろだすきの兵が一

人、何か切れ切れに叫びながら、  
てつじょくもつ  
鉄条網の中を走って来た。彼は戦  
友の屍骸しがいを見ると、その胸に片足  
かけるが早いか、突然大声に笑い  
出した。大声に、 実際その哄こうし  
笑ようの声は、烈しい敵味方の銃火の  
中に、気味の悪い反響を喚よび起し  
た。

「万歳！ 日本にっぽん万歳！ 悪魔降伏。  
怨敵おんてきたいさん退散。  
第×聯隊万歳！ 万歳！

万々歳！」

彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破った、手擲弾の爆発にも頓着せず、続けざまにこう叫び続けた。その光に透かして見れば、これは頭部銃創のために、突撃の最中発狂したらしい、堀尾一等卒その人だった。

二 間牒 かんちよう

明治三十八年三月五日の午前、

当時全勝集に駐屯していた、A騎

兵旅団の参謀は、薄暗い司令部の

一室に、二人の支那人を取り調べ

て居た。彼等は間牒の嫌疑のため、

臨時この旅団に加わっていた、第

×聯隊の歩哨の一人に、今し方捉

えられて来たのだった。

この棟の低い支那家の中には、

勿論今日も坎の火つ気が、快い温

みを漂わせていた。が、物悲しい  
戦争の空気は、敷瓦しきがわらに触れる拍車  
の音にも、卓たくの上に脱いだ外套がいとうの  
色にも、至る所に窺うかがわれるのであつ  
た。殊に紅唐紙べいとんじの聯れんを貼はった、埃ほこり  
臭しらかべい白壁の上に、束髪そくはつに結ゆった芸  
者の写真が、ちゃんと鉸びょうじで止めて  
あるのは、滑稽でもあれば悲惨で  
もあつた。

そこには旅団参謀のほかにも、

副官が一人、通訳が一人、二人の支那人を囲かこんでいた。支那人は通訳の質問通り、何でも明瞭めいりょうに返事をした。のみならずやや年嵩としかさらし、顔に短い髯ひげのある男は、通訳がまだ尋ねない事さえ、進んで説明する風があつた。が、その答弁は参謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間牒かんたつにしたい、反感に似たものを与えるらしかつ

た。

「おい歩兵ほへい！」

旅団参謀は鼻声に、この支那人

を捉とらえて来た、戸口にいる歩哨を

喚よびかけた。歩兵、それは白しろだ

襻すきたい隊たいに加わっていた、田口一等卒たぐちいつとうそつ

にほかならなかつた。彼は戸

の卍まんじごうし字格子ごうしを後に、芸者の写真へ

目をやっていたが、参謀の声に驚

かされると、思い切り大きい答を

した。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴つかまえたのは？ 掴つかまえた時どんなだったか？」

人の好いい田口一等卒は、朗読的にしゃべり出した。

「わたくしほしほしょうが私が歩あ哨しやうに立たっていたのは、この村の土塀どべいの北端、奉天ほうてんに通とずる街道かいどうであります。その支那人は二

人とも、奉天の方向から歩いて来  
ました。すると木の上の中隊長が、

「

「何、木の上の中隊長？」

参謀はちよいと目蓋まぶたを挙げた。

「はい。中隊長は展望てんぼうのため、木  
の上に登っていられたのでありま

す。その中隊長が木の上から、  
掴つかまえろと私に命令されました。」

「ところが私が捉とらえようとするど、

そちらの男が、はい。その髯のない男であります。その男が急に逃げようとなりました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけあります。」

「よし。」

旅団参謀は血肥ちぶとりの顔に、多少

の失望を浮べたまま、通訳に質問の意を伝えた。通訳は退屈たいくつを露あらわさないため、わざと声に力を入れた。

「間牒でなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが当然です。何

しろいきなり日本兵が、躍りかかっ

てきたのですから。」

もう一人の支那人、  
鴉片の

中毒に罹っているらしい、鉛色の

皮膚をした男は、少しも怯まずに

返答した。

「しかしお前たちが通つて来たの

は、今にも戦場になる街道じゃな

いか？ 良民ならば用もないのに、

「

支那語の出来る副官は、血色の  
悪い支那人の顔へ、ちらりと意地  
の悪い眼を送った。

「いや、用はあるのです。今も申

し上げた通り、私<sup>わたくし</sup>たちは新<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>屯<sup>とん</sup>へ、

紙幣<sup>しへい</sup>を取り換えに出かけて来たの  
です。御覧下さい。ここに紙幣も

あります。」

髯ひげのある男は平然と、将校たちの顔を眺め廻した。参謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、内心好い気味に思われたのだ。……

「紙幣を取り換える？ 命がけでか？」

副官は負まけ惜おしみの冷笑を洩らした。

「とにかく裸にして見よう。」

参謀の言葉が通訳されると、彼

等はやはり悪びれずに、早速あかはだか赤裸あかはだかになつて見せた。

「まだ腹巻はらまきをしているじゃないか？  
それをこつちへとつて見せる。」

通訳が腹巻を受けとる時、その  
白木綿しろもめんに体温のあるのが、何だか  
不潔に感じられた。腹巻の中には  
三寸ばかりの、太い針がはいつて  
いた。旅団参謀は窓明りに、何度  
もその針を検しらべて見た。が、それ

も平たい頭に、梅花ばいかの模様が  
ついているほか、何も変った所はなかつた。

「何か、これは？」

「わたくしは鍼医はりいです。」

髯のある男はためらわずに、悠

然と参謀の問に答えた。

「ついで次手に靴くつも脱ぬいで見る。」

彼等はほとんど無表情に、隠すべき所も隠そうとせず、検査の結

果を眺めていた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を検べて見ても、証拠になる品は見当らなかつた。この上は靴を壊こわして見るよりほかはない。そう思った副官は、参謀にその旨を話そうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚はくりょうや、旅団長などがはいつて来た。将軍は副官や軍参謀と、ちよつど何か

の打ち合せのため、旅団長を尋ねて来ていたのだった。

「露探ろたんか？」

將軍はこう尋ねたまま、支那人

の前に足を止めた。そうして彼等

の裸姿はだかすがたへ、じつと鋭い眼を注いだ。

後のちにある亜米利加人アメリカが、この有名

な將軍の眼には、M o n o m a n

i a じみた所があると、無遠慮

な批評を下した事がある。そ

のモノメニアツクな眼の色が、殊  
にこう云う場合には、気味の悪い  
輝きを加えるのだった。

旅団参謀は將軍に、ざつと事件  
の顛末てんまつを話した。が、將軍は思い  
出したように、時々うなず頷いて見せる  
ばかりだった。

「この上はもうぶん擲なぐつてでも、  
白状させるほかはないのですが、

「

参謀がこう云いかけた時、將軍は地図ちずを持った手に、床ゆかの上にある支那靴あしづきを指した。

「あの靴あしづきを壊こわして見給え。」  
靴は見る見る底をまくられた。

するとそこに縫いこまれた、四五枚の地図と秘密書類が、たちまちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顔の色を失ってしまった。が、

やはり押し黙ったまま、剛情じやうじやうに敷瓦を見つめていた。

「そんな事だろうと思っていた。」

將軍は旅団長を顧みながら、得意そうに微笑を洩もらした。

「しかし靴とはまた考えたものですね。おい、もうその連中れんじゆうには着物を着せてやれ。こんな

間牒かんちやうは始めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼けいがんには驚きま

した。」

旅団副官は旅団長へ、間牒の証  
拠品を渡しながら、愛嬌あいぎょうの好いい笑  
顔を見せた。あたかも靴に目

をつけたのは、將軍よりも彼自身  
が、先だつた事も忘れたように。

「だが裸にしてもないとすれば、  
靴よりほかに隠せないじゃない  
か？」

將軍はまだ上機嫌だつた。

「わしはすぐに靴と睨にらんだ。」

「どうもこの辺の住民はいけませ  
ん。我々がここへ来た時も、日の  
丸の旗を出したのですが、その癖  
家の中を検しらべて見れば、大抵露西ロシ  
亜アの旗を持っているのです。」

旅団長も何か浮き浮きしていた。

「つまり奸佞かんねい邪智じやちなのじゃね。」

「そうです。煮ても焼いても食え  
ないのです。」

こんな会話が続けている内、旅  
団参謀はまだ通訳と、二人の支那人を  
検べていた。それが急に田口  
一等卒へ、機嫌の悪い顔を向ける  
と、吐き出すようにこう命じた。

「おい歩兵！ この間牒はお前が  
掴まえて来たのだから、次手にお  
前が殺して来い。」

二十分の後、村の南端の路ばた  
には、この二人の支那人が、互に

辯髪べんぱつを結ばれたまま、枯柳かれやなぎの根が  
たに坐っていた。

田口一等卒は銃剣をつけると、  
まず辯髪を解き放した。それから  
銃を構えたまま、年下の男うしろの後に  
立った。が、彼等を突殺す前に、  
殺すと云う事だけは告げたいと思っ  
た。

「ニイ、  
」

彼はそう云って見たが、「殺す」

と云う支那語を知らなかった。

「ニイ、殺すぞ！」

二人の支那人は云い合せたように、じろりと彼を振り返った。しかし驚いたけはいも見せず、それぎり別々の方角へ、何度も叩頭こうとうを続け出した。「故郷へ別れを告げているのだ。」田口一等卒は身構えながら、こつその叩頭を解釈した。

叩頭が一通り済んでしまつと、  
彼等は覚悟をきめたように、冷然  
と首をさし伸した。田口一等卒は  
銃をかざした。が、神妙な彼等を  
見ると、どうしても銃剣が突き刺  
せなかつた。

「ニイ、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。する  
とそこへ村の方から、馬に跨またがつた  
騎兵が一人、蹄ひづめに砂埃すなほこりを巻き揚げ

て来た。

「歩兵！」

騎兵は 近づいたのを見れば

曹長そうちやうじうだった。それが二人の支那人

を見ると、馬の歩みを緩ゆるめながら、

傲然ごうぜんと彼に声をかけた。

「露探ろたんか？ 露探だろう。おれに

も、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑くしやうした。

「何、二人とも上げます。」

「そうか？　それは気前が好いな。」

騎兵は身軽に馬を下りた。そうして支那人の後にまわると、腰の日本刀を抜き放した。その時また村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の将校が近づいて来た。

騎兵はそれに頓着せず、まっ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない内に、三人の将校は悠々

と、彼等の側へ通りかかった。軍  
司令官！ 騎兵は田口一等卒と一  
しよに、馬上の將軍を見上げなが  
ら、正しい拳手の礼をした。

「露探ろたんだな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニ  
アの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下ごんかに刀をかざすと、一ひと  
打うちに若い支那人を斬きった。支那人

の頭は躍るように、枯柳の根もとに転ころげ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑はんでん点を拵はげ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快そうに頷うなずきながら、それなり馬を歩ませで行った。

騎兵は將軍を見送ると、血に染そんだ刀とうを提ひげたまま、もう一人の支那人ちしんの後に立たった。その態度は

將軍以上に、殺戮さつりくを喜ぶけしき気色けしきがあつた。「この×××らばおれにも殺せる。」田口一等卒はそう思  
いながら、枯柳の根もとに腰を下おろした。騎兵はまた刀を振り上げた。  
が、髯ひげのある支那人は、默然もくねんと首  
を伸ばしたぎり、睫毛まつげ一つ動かさ  
なかつた。……

將軍に従つた軍参謀の一人、

穂積中佐は鞍くらの上に、春寒しゅんかんの曠こう

野を眺めて行つた。が、遠い枯木かれこだ  
立ちや、路ばたに倒れた石敢当せきかんとも、  
中佐の眼には映らなかつた。それ  
は彼の頭には、一時愛読したスタ  
ンダアルの言葉が、絶えず漂つて  
来るからだつた。

「私わたしは勲章くんしょうに埋うづつた人間を見ると、  
あれだけの勲章を手に入れるには、  
どのくらい××な事ばかりしたか、  
それが気になつて仕方がない。…

…」

ふと気がつけば彼の馬は、

ずっと將軍に遅れていた。中佐は

軽い身震みぶるいをすると、すぐに馬を急

がせ出した。ちようど当り出した

薄日の光に、飾緒かざりおの金きんをきらめか

せながら。

### 三 陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、

阿吉牛堡あきしぎゅうほしに駐とどまっていた、第×軍司

令部では、午前しやういんさいに招魂祭を行つた

後のち、余興よきようの演芸会もよおを催す事になつ

た。会場は支那の村落に多い、野ので

天んの戲台ぎだいを応用した、急拵きゆうじうしらえの舞台

の前に、天幕テントを張り渡したに過ぎ

なかつた。が、その蓆敷むしるじきの会場に

は、もう一時の定刻ぜん前に、大勢おおぜいの

兵卒が集っていた。この薄汚い力

アキイ服に、銃剣を下げた兵卒の群は、ほとんど看客と呼ぶのさえも、皮肉な感じを起させるほど、みじめな看客に違いなかった。が、それだけまた彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂っているのは、一層可憐な気がするのだった。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外国の從軍武官たちと、その後の小高い土地に、

ずらりと椅子いすを並べていた。そこには参謀肩章だの、副官の襷たすきだのが見えるだけでも、一般兵卒の看かん客席かくより、遥かに空気が花やかだつた。殊に外国の従軍武官は、愚物ぐぶつの名の高い一人でさえも、この花やかさを扶たすけるためには、軍司令官以上の効果があつた。

將軍は今日も上機嫌じょうきげんだつた。何か副官の一人と話しながら、時々

番付を開いて見ている、その  
眼にも始終日光のように、人懐こひとなつ  
い微笑が浮んでいた。

その内に定刻の一時になった。

桜の花や日の出をとり合せた、手  
際の好い幕の後うしろでは、何度か鳴り  
の悪い拍子木ひょうしぎが響いた。と思うと  
その幕は、余興掛の少尉の手に、  
するすると一方へ引かれて行った。

舞台は日本の室内だった。それ

が米屋の店だと云う事は、一隅に  
積まれた米俵が、わずかに暗示を  
与えていた。そこへ前垂掛まえだれがけの米  
屋の主人が、「お鍋なべや、お鍋なべや」  
と手を打ちながら、彼自身よりも  
背せの高い、銀杏返いちじょうがえしの下女を呼び  
出して来た。それから、筋は  
話すにも足りない、一場いちじょうの俄にわかが始  
まった。

舞台の悪ふざけが加わる度に、

むしろじき 蓆敷の上の看客からは、何度も笑  
せい のぼ 声が立ち昇った。いや、その後の  
将校たちも、大部分は笑を浮べて  
いた。が、俄はその笑と競うよう  
に、ますます滑稽を重ねて行つた。  
そうしてとうとうしまいには、越  
ゆじふんどし 中禪一つの主人が、赤い湯もじ一  
すもつ つの下女と相撲をとり始める所に  
なつた。

笑声はさらに高まつた。 兵站監

部ぶのある大尉なぞは、この滑稽を  
迎えるため、ほとんど拍手さえし  
ようとした。ちよつとぞその途端だつ  
た。突然烈しい叱咤しったの声は、湧き  
返っている笑の上へ、鞭むちを加える  
ように響き渡つた。

「何だ、その醜態しゆうたいは？ 幕を引け！

幕を！」

声の主ぬしは將軍だつた。將軍は太  
い軍刀のつかに、手袋の両手を重ね

たまま、厳然と舞台を睨にらんで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆あっけ気

にとられた役者たちの前へ、倉皇そうこう

とさっきの幕を引いた。同時に蓆

敷の看客も、かすかなどよめきの

声のほかは、ひっそりと静まり返っ

てしまった。

外国の従軍武官たちと、一つ席

にいた穂積ほづみ中佐は、この沈黙を気

の毒に思った。俄は勿論彼の顔に

は、微笑さえも浮ばせなかつた。  
しかし彼は看客の興味に、同情を  
持つだけの余裕はあつた。では外  
国武官たちに、裸はだかの相撲を見せて  
も好いいか？　そう云う体面を重  
ずるには、何年か欧洲おうえいしゅうに留学した  
彼は、余りに外国人を知り過ぎて  
いた。

「どうしたのですか？」

フランス  
仏蘭西の将校は驚いたように、

穂積中佐をふりかえった。

「将軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、将軍は下品

な事は嫌いなのです。」

そう云う内にもう一度、舞台の

拍子木ひょうしぎが鳴り始めた。静まり返っ

ていた兵卒たちは、この音に元気を取り直したのか、そこから

拍手はくしゅを送り出した。穂積中佐もほっ

としながら、彼の周囲を眺め廻した。周囲にい並んだ将校たちは、いずれも幾分か気兼ねきがねそうに、舞台を見たり見なかつたりしている、

その中にたった一人、やはり軍刀へ手をのせたまま、ちようど幕の開あき出した舞台へ、じつと眼を注いでいた。

次の幕は前と反対に、人情がかつた旧劇だった。舞台にはただ屏風びょうぶ

のほかにも、火のともった行燈あんどうが置いてあつた。そこに頬骨ほこの高い年とし増まが一人、猪首いくびの町人と酒を飲んでいた。年増は時々金切声かなきりごえに、  
「若旦那わかだんな」と相手の町人を呼んだ。  
そうして、穂積中佐は舞台を見ずに、彼自身の記憶ひたに浸り出した。柳盛座りゅうせいざの二階の手すりには、十二三の少年が倚よりかかっている。舞台には桜の釣り枝がある。火影ほかげ

の多い町の書割かきわりがある。その中に  
二銭にせんの団洲だんしゅうと呼ばれた、和光わこうの不ふわ  
破ば伴んざ左衛門えもんが、編笠あみがさを片手みえに見得  
をしている。少年は舞台に見入っ  
たまま、ほとんど息さえもつこつ  
としない。彼にもそんな時代があっ  
た。……

「余興やめ！ 幕を引かんか？」

幕！ 幕！」

將軍の声は爆弾のように、中佐



そんな事を考えながら、叱声しつせいの  
起つた席を見ると、將軍はまだ不  
機嫌そうに、余興掛いっとうしゅけいの一等主計と、  
何か問答を重ねていた。

その時ふと中佐の耳は、口の悪  
い亞米利加アメリカの武官が、隣に坐つた  
仏蘭西フランスの武官へ、こつ話しかける  
声を捉とらえた。

「將軍Nも楽らくじゃない。軍司令官  
兼けん検閱官えつかんだから、」

やっと三幕目みまくめが始まったのは、  
それから十分の後のちだった。今度は  
木がはいっても、兵卒たちは拍手  
を送らなかつた。

「可哀かわいそうに。監視かんしされながら、  
芝居を見ているようだ。」 穂

積中佐は憐むように、ほとんど大  
きな話声も立てない、カアキイ服  
の群むれを見渡した。

三幕目の舞台は黒幕の前に、柳

の木が二三本立ててあつた。それはどこから伐<sup>き</sup>つて来たか、生<sup>なまなま</sup>々しい実際の葉柳だつた。そこに警部らしい髯<sup>ひげ</sup>だらけの男が、年の若い巡査をいじめていた。穂積<sup>ほづみ</sup>中佐は番附の上へ、不審そうに眼を落した。すると番附には「ピストル強<sup>じやう</sup>盗<sup>とう</sup>清水定吉、大川端捕物<sup>おおかわばたとりもの</sup>の場<sup>ば</sup>」と書いてあつた。

年の若い巡査は警部が去ると、

おおぎょうじつ  
大仰に天を仰ぎながら、  
ながながと浩  
歎たんの独白どくはくを述べた。何でもその意  
味は長い間あいだ、ピストル強盗をつけ  
廻まわしているが、逮捕たいほ出来ないとか  
云うのだった。それから人影でも  
認めたのか、彼は相手に見つから  
ないため、一まず大川の水の中へ  
姿を隠そうと決心した。そうして  
後うしろの黒幕の外へ、頭からさきに這は  
いこんでしまった。その恰好かっこうは鼻ひい

眞眼きめに見ても、大川の水へ没する  
よりは、蚊帳かやへはいるのに適当し  
ていた。

空虚の舞台にはしばらくの間あいだ、

波の音を思わせるらしい、大太鼓おおだいこ

の音がするだけだった。と、たち  
まち一方から、盲人が一人歩いて  
来た。盲人は杖をつき立てながら、  
そのまま向うへはいろうとする、

その途端とたんに黒幕の外から、さっ

きの巡査が飛び出して来た。「ピ  
ストル強盗、清水定吉、御用だ！」

彼はそう叫ぶが早いが、いき  
なり盲人へ躍りかかった。盲人は  
咄嗟とっさに身構えをした。と思うと眼  
がぱつちりあいた。「憾うらむらくは  
眼が小さ過ぎる。」中佐は微  
笑を浮べながら、内心おとなげ大人気ない  
批評を下した。

舞台では立ち廻りが始まってい

た。ピストル強盗は渾名通り、ちや  
んとピストルを用意していた。二  
発、三発、ピストルは続けさ  
まに火を吐いた。しかし巡査は勇  
敢に、とうとう偽目くらに縄をか  
けた。兵卒たちはさすがにどよめ  
いた。が、彼等の間からは、やは  
り声一つかからなかった。

中佐は將軍へ眼をやった。將軍  
は今度も熱心に、じつと舞台を眺

めていた。しかしその顔は以前よりも、遥かに柔しみを湛えていた。そこへ舞台には一方から、署長とその部下とが駈けつけて来た。

が、偽目くらと格闘中、ピストルの弾丸に中つた巡査は、もう昏昏の倒れていた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル強盗の縄尻を捉えた。その後には署長と巡査との、旧劇めい

た愁歎場しゅうたんばになつた。署長は昔の名めい奉行ぶぎょうのように、何か云い遺す事このはないかと云う。 巡査は故郷に母がある、と云う。 署長はまた母の事は心配するな。 何かそのほかにも末期まつごの際に、心遣りはないかと云う。 巡査は何も云う事はない、ピストル強盗を捉えたのは、この上もない満足だと云う。

その時ひっそりした場内に、

三度將軍さんどの聲が響いた。が、今度は叱声しっせいの代りに、深い感激の嘆声だつた。

「偉い奴じゃ。それでこそ日本男にっぽんだん児じじゃ。」

穂積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた將軍の頬ほには、涙の痕あとが光つていた。「將軍は善人だ。」中佐は軽い侮蔑ぶべつの中に、うち明るい好意

をも感じ出した。

その時幕は悠々と、盛んな喝采かつさいを浴びながら、舞台の前に引かれて行つた。穂積ほづみ中佐はその機会に、ひとり椅子いすから立ち上ると、会場の外へ歩み去つた。

三十分の後のち、中佐は紙巻を啣くわえながら、やはり同参謀の中村少佐なかむらと、村はずれの空地あきちを歩いていた。

「第×師団の余興は大成功だね。」

「閣下は非常に喜んでいられた。」  
中村少佐はこう云う間も、カイ  
ゼル髭ひげの端はしをひねっていた。

「第×師団の余興？ ああ、あの  
ピストル強盗か？」

「ピストル強盗ばかりじゃない。  
閣下はあれから余興掛を呼んで、  
もう一幕臨時にやれと云われた。

今度は赤垣源蔵あかがきげんぞうだったがね。何と  
云うのかな、あれは？ 徳利とくりの別

れか？」

穂積中佐は微笑した眼に、広い野原を眺めまわした。もう高粱トウモロコシの青んだ土には、かすかに陽炎かげろふが動いていた。

「それもまた大成功さ。」

中村少佐は話し続けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師団の余興掛よせに、寄席よせ的な事をやらせるそうだけ。」

「寄席的？」

落語らくごでもやらせるの

かね？」

「何、講談だそうだ。

水戸黄門みとこうもん諸

国めぐり」

穂積中佐は苦笑くしやうした。が、相手

は無頓着に、元気のよい口調を続けて行つた。

「閣下は水戸黄門が好きなのだそうだ。わしは人臣としては、水戸

黄門と加藤かとう清正きよまさねとに、最も敬意を

払っている。 そんな事を云つていられた。」

穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。 空には柳の枝の間に、あいだ細い雲母雲きららぐもが吹かれていた。 中佐はほつと息を吐はいた。

「春だね、いくらまんしゅう満洲でも。」  
「内地はもう裕あわせを着ているだろ  
う。」

中村少佐は東京を思った。 料理

の上手な細君を思った。小学校へ  
行っている子供を思った。そうし  
て かすかに憂鬱になった。

「向うに杏あんずが咲いている。」

穂積中佐は嬉しそうに、遠い土  
塀むらに簇むらつた、赤い花の塊りを指し

た。E c o u t e - m o i ,

M a d e l i n e . . . . . 中佐

の心にはいつのまにか、ユウゴオ  
の歌が浮んでいた。

## 四 父と子と

大正七年十月のある夜、  
中村少<sup>なかむら</sup>

将、  
当時の軍参謀中村少佐は、  
西洋風の応接室に、火のついたハ  
ヴァナを啣<sup>くわ</sup>えながら、ぼんやり安  
楽椅子によりかかっていた。

二十年余りの閑日月<sup>かんじつげつ</sup>は、少将を  
愛すべき老人にしていた。殊に今  
夜は和服のせい<sup>は</sup>か、禿<sup>あが</sup>げ上った額

のあたりや、肉のたるんだ口のまわりには、一層好人物じみた気色けしきがあつた。少将は椅子いすの背せに靠もたれたまま、ゆっくり周囲を眺め廻した。それから、急にため息を洩らした。

室の壁にはどこを見ても、西洋の画えの複製らしい、写真版の額がくが懸かけてあつた。そのある物は窓に倚よつた、寂しい少女の肖像しょうざうだつた。

またある物は糸杉の間に、あいだ太陽の  
見える風景だった。それらは皆電  
燈の光に、この古めかしい応接室  
へ、何か妙に薄ら寒い、げんしゆく厳粛な空  
気を与えていた。が、その空気は  
どう云う訣か、わけ少将には愉快でな  
いらしかった。

むごん無言の何分かが過ぎ去った後、のち  
突然少将は室外に、かすかなノッ  
クの音を聞いた。

「おはいり。」

その声と同時に室の中へは、大学の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少将の前に立つと、そこにあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼつにこつ云つた。

「何か御用ですか？ お父さん。」

「うん。まあ、そこにおかけ。」

青年は素直すなおに腰おろを下した。

「何ですか？」

少将は返事をするために、青年の胸の金鈕きんボタンへ、不審ふしんらしい眼をやった。

「今日きょうは？」

「今日は河合かわいの　お父さんは御存知ないでしょう。　僕と同じ

文科の学生です。河合の追悼会ついとつかいがあつたものですから、今帰つたばかりなのです。」

少将はちよいと頷うなずいた後のち、濃い  
ハヴァナの煙を吐いた。それから  
やっと大儀たいぎそうに、肝腎かんじんの用向き  
を話し始めた。

「この壁にある画えだね、これはお  
前が懸け換えたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでしたし  
たが、今朝けさ僕が懸け換えたのです。  
いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはな

いがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ひ。」

「この中へですか？」

青年は思わず微笑した。

「この中へ懸けてはいけないかね？」

「いけないと云う事ありませんが、しかしそれは可笑しいでしよ。」

「肖像画はあすこにもあるよ。」

ないか？」

少将は炉ろの上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブラントが、悠々と少将を見下していた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「そうか？　じゃ仕方がない。」

少将は容易に断念した。が、また葉巻の煙を吐きながら、静かに

こう話を続けた。

「お前は、と云うよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思っているね？」

「別にどうも思っていないません。」

まあ、偉い軍人でしょう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌ばんしやくの酔よを感じていた。

「それは偉い軍人だがね、閣下はまた実に長者ちやうじやうらしい、人懐ひとなつこい性

格も持つていられた。……」

少将はほとんど、感傷的に、將軍の逸話いつわを話し出した。それは日露戦役後、少将が那須野なすのの別荘に、將軍を訪れた時の事だった。その日別荘へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになった、そう云う別荘番の話だった。少将は案内を知っていたから、早速裏山へ出かける事に

した。すると二三町行つた所に、  
綿服を纏まとつた將軍が、夫人と一しよ  
に佇たたずんでいた。少將はこの老夫妻  
と、しばらくの間あいだ立ち話をした。  
が、將軍はいつまでたつても、そ  
こを立ち去ろうとしなかつた。

「何かここに用でもおありです  
か？」  
こう少將が尋ねると、  
將軍は急に笑い出した。「実はね、  
今妻さいが憚はばりかへ行きたいと云うもの

だから、わたしたちについて来た学生たちが、場所を探しに行つてくれた所じゃ。「ちようど今頃、もう路ばたに毬栗いがくりなどが、転がっている時分だった。

少将は眼を細くしたまま、嬉しそうに独り微笑した。そこへ色づいた林の中から、勢の好いい中学生が、四五人同時に飛び出して来た。彼等は少将に頓着とんちやくせず、将

軍夫妻をとり囲むと、口々に彼等が夫人のために、見つけて来た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に来て貰うように、無邪気な競争さえ始めるのだった。「じゃあなた方に籤を引いて貰おう。」  
「將軍はこつ云つてから、もう一度少将に笑顔を見せてた。……」

「それは罪のない話ですね。だが

西洋人には聞かされないな。」

青年も笑わずにはいられなかつた。

「まあそんな調子でね、十二三の中学生でも、N閣下と云いさえすれば、叔父<sup>おじ</sup>さんのように懐<sup>なつ</sup>いていたものだ。閣下はお前がたの思うように、決して一介の武弁<sup>ぶべん</sup>じゃない。」

少将は楽しそうに話し終ると、

また炉の上のレムブラントを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い画描えかきです。」

「N閣下などはどうだろう？」

青年の顔には当惑の色が浮んだ。

「どじつと云っても困りますが、

まあN將軍などよりも、僕等に

近い気もちのある人です。」

「閣下のお前がたに遠いと云うの

は？」

「何と云えば好いですか？　　ま

あ、こんな点ですね、たとえば今

日追悼会ついでとうかいのあつた、河合かわいと云う男

などは、やはり自殺しているので

す。が、自殺する前に　　」

青年は真面目まじめに父の顔を見た。

「写真をとる余裕よゆうはなかつたよう

です。」

今度は機嫌の好い少将の眼に、

ちらりと当惑の色が浮んだ。

「写真をとつても好い<sup>い</sup>じゃないか？

最後の記念と云う意味もあるし、

「

「誰のためにですか？」

「誰と云う事もないが、我々

始めN閣下の最後の顔は見たいじゃないか？」

「それは少くともN將軍は、考うべき事ではないと思うのです。僕

は將軍の自殺した気もちは、幾分  
かわかるような気がします。しか  
し写真をとったのはわかりませ  
ん。まさか死後その写真が、ど  
この店頭にも飾かざられる事を、  
「

少将はほとんど、憤然ふんぜんと、青年  
の言葉ことばを遮さへった。

「それは酷こくだ。閣下はそんな俗人  
じゃない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不相あいか変わらず、顔色かおいろも声

も落ち着いていた。

「無論俗人じゃなかったたでしょう。」  
至誠の人だった事も想像出来ず。  
ただその至誠が僕等には、どうも  
はっきりのみこめないのです。僕  
等より後の人間には、なおさら通  
じるとは思われません。……」  
父と子とはしばらくの間、あいだ 気ま  
ずい沈黙を続けていた。

「時代の違いだね。」

少将はやつとつけ加えた。

「ええ、まあ、」

青年はこう云いかけたなり、ちよ  
いと窓の外のけはいに、耳を傾け  
るような眼つきになった。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少将は足を伸ばしたまま、嬉し  
そうに話題を転換した。

「また楯マルメロが落ちなければいいが、

.....」

(大正十年十二月)

底本：「芥川龍之介全集4」ちく  
ま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1

月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月

15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥  
川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3

月）1971（昭和46）年11

月

入力：j . u t i y a m a

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネット

の図書館、青空文庫（[http:](http://www.aozora.gr.jp/)

[/ / w w w . a o z o r a . g r .](http://www.aozora.gr.jp/)

[j p /](http://www.aozora.gr.jp/)）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボラ  
ンティアの皆さんです。